

第一回ふくふく童話大賞「大賞」

笛ふき太良

むかし、こえく森城むいぐすく ちいに小さな村むらがありました。そこに住すんでいる人ひとたちは皆親切みなしんせつでやさしい人ひとたちでした。村人むらびとたちは畑はたけを耕たがし、野菜やさいを作りつく、さとうきびを植うえ、牛うしや豚ぶたを飼かっていました。どの家いえも裕福ゆうふくでした。ですから、人ひとをうらやんだりねたむこともなく、体からだの元気げんきな人ひとは体からだの弱よわい人ひとを助たすけ、目めの見みえない人ひとの目めとなり、耳みみの聞きこえない人ひとの耳みみとなつて、

皆みな助たすけ合あつて楽たのしく暮くらしていまた。

こえく森城むいぐすくのこの小ちいさな村むらに、もう一ひとつ不思議ふしぎなことがあ

りました。それは笛ふえふき太良タラーという男おとこが住すんでいることでした。

た。太良タラーは笛ふえふきの名人めいじんでした。太良タラーが笛ふえをふくとその音ねい色ろ

に村人むらびとたちは心こころをうたれ、聞ききほれてしまいます。太良タラーの家いえ

は茅かやぶきの小ちいさな家いえでしたが、神棚かみだなにはたくさんのふえの笛ふえが

飾かざられていました。

子供こどもたちは、いつも一本松いっほんまつの茅かやぶき屋根やねの太良タラーの家いえに集あつま

つてきて、

「ふえ笛にいふふえきにい兄にいちゃんふえ笛ふいいとくれくれ。」

とせがみます。

もうひとりの子供こどもは、

「いや、私わたしはふえキふえビふえ笛ふいいとくれくれ。」

といいます。皆みんな、口々くちぐちに自分じぶんの好きすきな音色ねいろの名なをいってせがみます。

「ようようわかった。わかった。けんかしないで、ここにおすわり。きょうは、いもふえ笛ふえでいこう。いもふえ笛ふえふいてきかそう

な
」

「わーい」

子供たちは返事をして太良の前にすわりました。

太良がい

も笛をふくと

いも笛音色は誰が好き

紅いも焼きいも ふかしいも

いも笛音色は誰が好き

みっちゃん よっちゃん いっちゃんよ

いも笛音色はおなご好き

かくれて食べたみよちゃんの

もらったおならが プッププツ

とゆかいな音色ねいろをたてて響ひびきます。子供こどもたちはその音色ねいろを聞きいて笑わらいだしました。

「次つぎはキビ笛ぶえがいいわ。笛ぶえふき兄にいちゃん、キビ笛ぶえふいて聞きかせておくれ」

とひとりおんなの女この子いが言いいました。するとほかの皆みんなが「キビ笛ぶえふいて聞きかせ

ておくれ」と頼たのみます。

「よしよしわかった。今度こんどはキビ笛ぶえふいて聞きかそうな。キビ笛ぶえふいたら日ひが暮くれる。そしたら皆みんな帰かえろうね」

「はい、キビ笛ぶえき聞いたら帰かえります。だから、兄にいちゃん笛ぶえふいて聞きかせておくれ」

タラー
太良は、わいわいさわいでいる子供こどもたちに、静しずかにするよう
に指ゆびを口くちもとにあて、棚たなからキビ笛ぶえをとりだしてふきました。
すると何なんともいえぬ甘あまい甘あまい音色ねいろが、あたりに響ひびきわたりました。
した。

さとうきびの汁しるは甘あまいよ甘あまいよ

甘あまいものはなーに

ハチミツ ハナミツ サトウヅル

それより甘あまい甘あまいものなーに

それより甘い甘いものは

皆みんなの忘わすれた母かあちゃんのおっばい

泣なきむし赤あかちゃんにとられて泣ないた

あのなつかしいおっばいの味あじ

皆みんなもう忘わすれたのかな

お兄にいちゃんお姉ねえちゃんになつたから

かわいい弟おとうと妹いもうとにゆずってやった

あのなつかしいお母かあちゃんのおっばい

泣なきむし赤あかちゃん寝ねたときに

もう一度いちどねだってみようかな

あの甘いあま甘いあまやさしい母かあちゃんのおっぱい

子供こどもたちは静しずかに聞きいていました。笛ふえの音おとがやむと子供こどもたちは、ひとりふたりと静しずかに家いえへ帰かえり始はじめました。子供こどもたちはやさしいお母かあさんのことおもを思おもいだしていました。

「お兄にいちゃん、あしたも笛ふえふいて聞きかせてね。さようなら」

「ああ、いいよ。いつでもおいで。笛ふえはいっぱいあるからね。

さようなら」

笛ふえふき太良タラーが笛ふえをふきながら道みちを歩あるけば、子供こどもたちがあとからついてきました。そして「今日きょうの笛ふえはいね笛ふえだね」とさ

さやきあっています。

春はるまきいねが芽めをふいて

うりずん 五月さみだれ雨 梅雨つゆすぎて

おてんと様さまのお恵めぐみも

さしばの渡わたる秋あきくれば 黄金おうごん 瑞穂みずほの刈かり入いれだ 刈かり入い

れだ

今日きょうは楽たのしい秋あきまつり 太鼓たいこのはやしに笛ふえの音おとが

ピーヒヤララ ピーヒヤララ

今日きょうは瑞穂みずほのお祭りまつ日 瑞穂みずほの村むらのお祭りまつだ

このように、太良たらーの笛ふえは、村人むらびとの日々ひびの生活せいかつや村祭りむらまつの

ぎょうじ 行事も、なん 何でも ぶえ 笛の ねいろ 音色で あら 現わしてくれ ます。 ことども 子供が 生まれ
た日には ことども 子供 ぶえ 笛。 けっこんしき 結婚式には たかさご 笛に しゃくはち 尺八 ぶえ 笛。 ことども 子供 げん
かを しずめるには かなかお 仲直り ぶえ 笛。 こもりうた 子守歌には すずき ぶえ 笛。 かぞ 数えあげ
れば きりが ありません。 タラー 太良は ぶえ 笛 ぶき 名人 として とな 隣り 村でも
ひょうばん 評判 になっ て いました。

ある ばん 晩、 タラー 太良は ことども 子供 たちが かえ 帰っ て しまっ とうと ふうろ 風呂に 入り、 タ
ご はん 飯を すますと ね 寝て しまっ ました。 タラー 太良が ね 寝るのを 待つ て い
た ように ひとり の だろぼう が タラー 太良の いえ 家へ しのび こみ、 神棚 か
ら ぶえ 笛を ひとつ ぬす 盗ん で いか ました。

「こんな に いっぱい あるの だから、 ひとつ ぐら い なくな った

つてわかるものか。笛ふえふき名人めいじんが知らんがひとりだけもてやがって。よし、あしたは笛ふえふき勝負しょうぶをして太良タラーをやっつけてやろう。』どろぼうはニヤリと笑わらいました。

あくる日ひ、隣となり村むらの次良ジラーが太良タラーの家いえへと急いそいでいます。まわりには次良ジラーの村むらの人ひとたちがたくさんついてきていました。次良ジラーはこえく森城むいぐすくの太良タラーの村むらにつくと、村人むらびとたちに向むかって言いいました。

「やあ、やあ、わしは隣となり村むらの次良ジラーだ。笛ふえふき名人めいじんの次良ジラーなり。今日は太良タラーと笛ふえふき勝負しょうぶにやってきた。誰だれの笛ふえがうまいか勝負しょうぶだ。」

隣り村の人たちも、太良の村の人たちも、これはおもしろ

くなつたと口々につぶやいて、次良のあとについてきました。

太良はかけつけてきた子供たちの知らせで次良が来るのを知

っていました。次良と村人たちは田んぼのあぜ道を通り

一本松の茅ぶき屋根の太良の家に行ってきました。次良は

太良に合うとすぐ、

「やい、やい、あんたがこの村一番の笛ふき名人太良かね。

わしは隣り村の笛ふき名人次良だ。今日は笛ふき勝負にやっ

てきた。誰が一番うまいか勝負だぜ」とどなりました。

「次良名人、どうぞこちらの座ぶとんにおすわりください。

遠とおいところごくろうさん」

子供こどもたちも村人むらびとたちも、二人ふたりが向むかいあつてすわっている
様子ようすを庭にわの方かたから見みていました。

「次良ジラー名人いちばんめいじん、あなたが一いちばんめいじん番名人いちばんめいじんでよいのです。勝負しょうぶなど
笛ふえをおもちやにしてはいけません。でも、これだけ村人むらびとが集あつ
まっていますから笛ふえふき祭まつ

りといきましょう」

次良ジラーは一いちばんめいじん番名人いちばんめいじんといわれて嬉うれしくなりました。

「よしよし太良だいら、それではわしからいく。よく聞ききほれるよ。

」

次良ジラーが笛ふえをふくと、とても悲かなしい音色ねいろが聞きこえてきました。
村人むらびとたちはあまりの悲かなしさに泣なき出す人ひともでてきました。
子供こどもたちはお父とあさんやお母かあさんの胸むねにしがみついています。
年寄としよりはこの世よの残のこり少ない人じん生せいを思おもい出だして泣ないています。
若わかい人ひとたちは飢ききんや災さい害がいが来くるのを心しん配ぱいし、女おんなたちは子供こども
が病び気ょうきにかかりはせぬかと心こころを痛いため、子供こどもたちはこの幸しあせ
な村むらの生せい活かつが終おわるのではないかと不安ふあんになっ
た。皆みんなが不安ふあんと悲かなしさですすり泣ないています。この世よでこれ
ほど悲かなしい音色ねいろは今いままで聞きいたことがありませんでした。
「やめとくれ、こんな悲かなしい笛ふえやめとくれ。」

ひとりの子供が叫びました。

「そうだ、悲しい悲しい笛の音はやめとくれ、やめとくれ。」

男も女も年寄りも若者も口々に叫びました。笛を吹いて
いる次良も泣いていました。目から涙がポロポロ流れ出して
くるのに、笛の悲しい音色に取りつかれて、笛を口から離す
ことさえ忘れていたのです。「はっ」と気がついて次良は
笛をふくのをやめました。先ほど心に感じた悲しい思いがま
だ残っており、皆はしばらく泣いていました。

そのときです。どこからか清らかな美しい音色の笛の音が

聞こえてきました。その音は清らかで、すがすがしく皆の
心の奥深く響き渡っていきました。清らかな水の流れのよう
に皆の耳をくすぐり、暗い心の雲をふりはらってくれまし
た。子供たちは楽しくなりうきうきしてきました。ますま
すバラ色に輝く村の将来を子供たちは信じました。若い人た
ちは豊年祭の夢を見、年寄りには安らかな一生を感じ、女たち
は子供の健康を願い、皆が生きることの楽しさを思い出し笑
いだしました。こんな楽しい音色は初めてでした。皆うきう
きしてきました。

わーい祭だ、祭りだ、笛ふき踊れ

太鼓たいこを鳴ならせ 手てを打うち踊おどれ

祭りまつだ祭りまつだ 笛ふえふき踊おどれ 太鼓たいこをたたけ

今日きょうは楽しいたのい笛ふえ祭りまつり ワツシヨ ワツシヨ

笛ふえふき太良たらー心こころもはづむ

笛ふえふき名人めいじん 笛ふえふき太良たらー

子供こどもたちが声こえをだして踊おどりだしました。それを見みて次良じらーが

いいました。

「すまん、わしの負まけだ。この笛ふえもこの神棚かみだなから盗ぬすんだものだ。わしが悪わるかった。あなたの笛ふえの音おとを聞きいて心こころがあらわれおもる思おもいがした。やっぱり、あなたが笛ふえふき名人めいじんです。」

次良は笛を返し盗んだことをわびました。

「次良、あなたの笛もたいへんうまいものです。あなたが盗んだ苦の笛と私の持つてる楽な笛はふたつでひとつなのです。対になっているのです。これは苦楽の笛ですよ。あなたは運が悪かったのです。もし、あなたが楽の笛を取っておれば、私が苦の笛をふかなければなりませんでした。ただそれだけの違いです。楽しい笛祭りになりましたよ。」

「笛ふき兄ちゃん、バンザイ　バンザイ。」

こえく森城は静かに暮れていきました。